

Title	ジャンケレヴィッチのヴィルトゥオーソ論における「技術－生成」の問題
Author(s)	近藤, 秀樹
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42201
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	近藤 秀樹
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 15707 号
学位授与年月日	平成12年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	ジャンケレヴィッチのヴィルトゥオーソ論における「技術—生成」の問題
論文審査委員	(主査) 教授 根岸 一美 (副査) 教授 山口 修 教授 鷺田 清一

論文内容の要旨

音楽の世界でヴィルトゥオーソ (virtuoso) と言えば、並外れた技術的力量を持つ演奏家のことである。彼らはそうした力量を示すことによって聴衆を熱狂させる。が、一方では彼らの示すものは、技巧に溺れた空虚な音楽、大向こうをねらった派手な自己演出、作品と作者を蔑ろにした演奏といった面があり、否定的なイメージを併せ持つ。本論文はこうしたヴィルトゥオジテの二面性に考察の発端を得つつ、今世紀フランスの美学者、ヴラディミール・ジャンケレヴィッチ (Vladimir Jankélévich 1903-1985) の『リストとラプソディ ヴィルトゥオジテ試論』(Liszt et la rhapsodie, essai sur la virtuosité, 1979) を読み解きながら展開した、すぐれて哲学的、本質論的なヴィルトゥオーソ論であり、5つの章から構成されている (A4判本文全100頁。うち74~96頁は「註」、97~100頁は「文献」)。

第I章「ヴィルトゥとアレテー」では、ジャンケレヴィッチがヴィルトゥオーソの「ヴィルトゥ」をアリストテレス的な「徳」(アレテー)、つまり潜在的なものの顕在化と関連づけ、さらにアレテーを「中を得ていること」(メソテース)と関連づけていることが指摘される。そして音楽の場合、「中」(メソン)が時間的に可変的なものであることから、ヴィルトゥオジテが「好機」(カイロス)の捕捉として理解されることが解き明かされる。ヴィルトゥオーソの演奏の正確さは機械のそれではなく、流動する状況下で標的を狙う狩人の正確さであり、この正確さの追求において、ヴィルトゥオーソは一回性の時間、不可逆的な時間と闘うものとされる。

第II章「生成する超絶技巧」では、リストの《超絶技巧練習曲》(Études d'exécution transcendente) についてのジャンケレヴィッチの解釈が取り上げられる。ここではヴィルトゥオーソが挑む技術的困難が、潜在的な能力を顕在化させる仕掛けとして捉えられるとともに、「超絶技巧」の「超絶」が人間の技術的限界を次々に突破してゆく「超越」(transcendance) であること、そしてこの「超越」が「限界を設けることで限界を超え、限界を超えることで新たに限界を設ける」というジグザグ的生成であることが示される。そこから、ヴィルトゥオーソが絶えず限界を乗り越えてゆく「越境者」であり、潜在的なものの顕在化としてのヴィルトゥオジテが「絶えざる越境」という動的プロセスであることが明らかにされる。

第III章「ヴィルトゥオジテの病理学」では、まず、絶えず越境し続けることは実際にはきわめて困難であり、限界への挑戦はしばしば単調な「記録破り」に墮してしまうことが指摘される。ジャンケレヴィッチによればヴィルトゥオジテはその意味で頹廢の芽を含んでおり、しかも頹廢の主たる原因は質的差異の量的差異への還元にあるという。したがって越境者としての力動性を保つためには、ヴィルトゥオジテは量的拡大にのみ傾斜してはならず、質的多様

性をも目指さねばならない。ここにおいてヴィルテュオジテはベルクソンの「生成」や「創造的進化」にも比すべき質的多様化の過程として捉えられることになる。

第IV章「越境する手」では、質的多様性の探究は手の使命であることから、第II、III章で扱った問題が、手・指を中心とする身体的技術の問題として論じられる。ここでは身体運動にひそむ経済原則、すなわち「身体図式」の働きが指摘されるが、「絶えざる越境」としてのヴィルテュオジテは、手が内包する身体図式を絶えず組み換えることで、このパターン化を撃ち破ろうとする。質的多様性の探究は、ひとつにはこうした身体図式が多様化を通して実現されるのである。

第V章「交差する手」では、この身体図式が多様化が音楽のありかたをも多様化してゆく具体的な一例として、アルベニスのピアノ曲における「両手の交差」が考察される。ジャンケレヴィッチによれば、アルベニスが好んで行う「両手の交差」は演奏上の合理性・経済性よりはむしろ音色の探求を目的としている。そこでは、身体図式が多様化が響きや音色の多様化と結びつく。ヴィルトゥオーソたちは自分の楽器から大音量を引き出すだけでなく、色彩の多様化をももたらすのである、と論者はしめくくっている。

論文審査の結果の要旨

本論文は音楽学の分野であり十分に扱われてこなかったヴィルトゥオーソのわざ、すなわちヴィルテュオジテを、その本質的な面から追求し、技術や生成といった哲学的な問題へと関連づけた、思索性の高い論考である。ヴィルテュオジテの現象の解明を通じて哲学への道筋が開かれうること、また逆に音楽現象の解明に哲学の力が少なからぬ意味を持つことを明快に示した点が、この研究の最も大きな寄与と評しえよう。ジャンケレヴィッチの著作や関連資料の丹念な読みに基づいているが、たんに彼の論考の跡づけに留まることなく、ジンメルやベルクソンといった哲学者の思想にも言及することにより、論者の独自の思想史的把握を提示していることも、高く評価される点である。

しかしながら、例えばヴィルテュオジテの「超越」からジンメルの「越境」を特定し、さらにそれを「生成」と関連づけていくためには、より厳密な文献学的押さえが求められるであろうし、また、哲学的解釈を重んじるあまりに実際の演奏現象や楽器の扱い等についての、論者自身の美的判断や具体的な知解が必ずしも十全に示されていないことは惜まれる。しかし、これらの問題は全体の論考の基本的な成り立ちをいささかも損なうものではなく、また、極めて明快かつ十分に練られた表現によって、思索的文章の一つの模範を示し得たことも、学問の世界に一石を投じうるものと評しえよう。よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。